

2024（令和6）年卒業証書・授与式 式辞

厳しかった十勝の冬もようやく終わりを告げ、季節は次第にさわやかな春に向かって動き出しているように感じられます。卒業される地域教養学科35名、生活科学科栄養士課程25名、社会福祉科子ども福祉専攻57名、同介護福祉専攻10名、計127名の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。ご来賓の小野信次音更町長様をはじめとして、多くの皆様のご列席の前で令和5年度第63回卒業証書・学位記授与式を挙行できることは卒業される127名の皆さんもとより、本学教職員ならびに学園関係者にとつても幸せなことと思っています。また、保護者の皆様におかれましても、お喜びはひとしおのことと存じます。

さて私は昨年の報恩講で皆さんに自分の思いをお話させていただきました。その際、私が自身の64年にわたる人生の中で最も重要だと思ったことを言葉に託し、お話しを致しました。繰り返しになりますが、それは「好奇心」「想像力」そして「覚悟」の3つの言葉でした。

「好奇心」とは、自分のうちに閉じこもることなく積極的に外の世界に繋がっていくことする熱い思いのこと、「想像力」とは、それとは逆に内省の力を養い、感性豊かな自分を作り上げていこうとすること、そして「覚悟」とは、人生で必ず生じる壁や荒波に立ち向かう際、自分をどこまで信じきれるのかどうか、という真摯な問いかけに他なりません。ぜひそんなことを常に自らに問いかけ、これから的人生に立ち向かっていってください。

今、世の中では様々な不正が暴露され、その弁明に四苦八苦している大人が多数出て参りました。きっと、「バレないから」などと自分の今の立場にあぐらをかいて他者を舐めてしまっている結果でしょう。しかし、どうか皆さん、必ず「お天道様」は見ている、と思い、自らの行動や生き方が自分に恥じないかどうか、常に立ち止まって考えてみてください。進むべき道はその時、自ずとひらけてくるはずです。

明治の文豪・夏目漱石に「こころ」という小説があります。高校の教科書にも掲載されていますのでご存じの皆さんも多いかと思います。自分の嫉妬の思いに引きずられ、親友Kを裏切り、結果彼を自死に追い込む。その罪の意識をずっと背負いつつ「先生」と称される人物はやがて死を選ぶ、そんなエピソードが出て参ります。人はかように弱い存在です。うまくいかないことを他人のせいにして、なんとか自分の正当性を保証しようとします。しかし、それらは全部結局、自分自身に跳ね返ってくるのです。だから、真っ当に、生真面目に生きていかなけばいけない、それが充実した人生を送る一番の道なのだと私は確信しています。

ここで詩人の茨木（いばらき）のり子さんの詩を紹介します。「自分の感受性ぐらい」というタイトルの詩です。

自分の感受性ぐらい

茨木 のり子

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠つておいて

気難しくなってきたのを

友人のせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを

近親のせいにするな

なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを

暮らしのせいにはするな

そもそもがひよわな志にすぎなかつた

駄目な」との一切を

時代のせいにするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性ぐらい

自分で守れ

ばかものよ

保護者の皆様、改めてお祝いを申し上げます。そして2年間、本当にお疲れ様でした。学生たちは確かに成長を遂げてきました。どうか安心して社会に送り出してあげてください。しかし、たまに迷うことがあれば、どうか手を差し伸べてあげてください。

本学の教育をご理解そしてご信頼をいただいたことに、この場を借りて重ねて厚くお礼申し上げます。

最後になりますが、卒業生の皆さん、世の中に出ると、いいことばかりではありません。時代遅れのとんでもない大人や不条理に苦しめられることもたくさんあります。しかし、それでも、その分幸せなこともたくさん経験できます。ですから、それを楽しみに、新しい世界に思いつ切り飛び込んでください。次の時代は皆さんのためにあります。皆さんの御活躍、そして幸せを心から祈念しております。

令和6年3月15日

帯広大谷短期大学 学長 田中 厚一